



1861
2止



門へ遠13
1.861
2止

於舟女
各助傳

高野たかののや難がた髮かみ刀やいば卷まき之の下した

東都 歎なげ臨み間ま士し編ひ

中四 寡婦あづま媪おきなを貪むさぼりてを襦じゆを釀かせ

且また説と強くハも虚き六ろく平へいが老母らうぼヲを討うて立去たちさりしをとさらふ者者
ならしとふつど何なんとかくに京きやう護ごてを鎌倉かまくらの住居すまいも物憂ものうれ信ま
州しゆ善光寺ぜんくわうじの邊へ小知せうちしるるそのあらじに密ひそ小彼所せうか立越たちこ
暫しばく鎌倉かまくらの動靜どうせいを窺うかがひぬるる奥おく小せうままと此郷こゝ小一人せうひとりの寡婦あづま
婦めありりりり名なを雪路ゆきぢと叫よびぬ年とし紀き三十さんじゆづづりりたたるる
が少せう盛さかままるるここほほと散残ちりぞろるる色いろ香かも尚なほ愛あいべべた

高野たかの難がた髮かみ下した

ほどの姿あり是素富饒人の妻なりしが夫より三年前
辞世独仕せむと何足らぬともかくてありぬる夫の
余澤小よるとのたらし然る小此寡婦が性質貪利好
色なるれを夫辞世しころ血属の曹后夫を迎へよちを勃
めしと夫ありてハ己が心のまふくなしゆを事と左右小
よちて固辞密ふ風流るる少年ふとく 媼れまゝの賭
そのかどし一揮くまぐりかむしきことものまを行ひたり斯
媼酒小のこ沈りし故少や近頃心氣悪あつたりゆと小
を多方小醫茶を用ゆれど其強をかろししが或醫曹の

云へりくハ病を素氣疑生ぶれば斯くあらんより當国
諏訪の温泉の諸病に驗ありと遠近人の集来てこと
不ろ小熱雨とば彼所小往て湯治しめが自ら心ちく
鬱氣晴て病もおこるぬと初ゆる小より取頃より
諏訪小来て湯治せし漸く小快氣て今ハほとく全
諭せべく見ふなり此當時都より牛都といへる聲此
地小来て湯治してありしが世小誓なることハ大くハ音
曲と業とるはここのあつが此牛都も筑紫琴の妙手
小てまゝ深く好々といハ一夜徒然たのりまふ小手馴し琴

高野予上維支の下



高予 柱 後 下



雪路 琴音と
春情と
飛鳥

高野 舞 七 下

をとう出いくさあしはく声面白こゝろ謳うたなり是誰知此一曲小より
て一条の春路をむいさ生う牛都うしつと雪路ゆきぢう身みとてまむま一件
を下くだり来るくる萌もとふありあり乃すなはち此牛都うしつと雪路ゆきぢとと只局一
重かさを隔へけるるののちちれれが雪路ゆきぢ忽たちちちふふれれを漏れすすふ呂律りよと
整ととの其音清幽哀怨うらみそそろろ小心こころ動うごけり素かより好色このなるも
ののちちななむむひひかかららふふ業わざををばば愛あいするるああららふふ殊こと小都こもも少まろろるる妙
手てななららばば深こくく聽きけけるるその人ひとののゆゆりりくく隔への紙門かみの隙ひまよ
まままま一い眼めを窺うかがへへど障さわるるものありてささぞぞろろふふ着きへへぬぬいいと
ゆゆりりくくいいろろああるる人ひとそそととささららいいふふ出で一い宿しゆくのの不ふ髪かみふふ回まへへむ

都みやこののものものあるあるよよ云い明あへへ一いほほふふ鼓こ音ねとと志しで都みやこ
人ひとのの渾まて風流ふうりゅうするることことののちち多おほくくふふ声こゑとと斯かく優うふふややに
ささいいそのその貌かたちももささかか艶あやちちななむむべべ頻しきり小春情こはる動うごとと兔角想うしつ
ああららりり夜よもも更かぬぬふふが琴ことの音ねもも止やめめ雪路ゆきぢりりととああひひたたりり
残のこ多くく想おもへへとと詮せんももななくくて寢いるるが其夜三更そのよと
ぬぬととおお月つきととささ左側地さわおおびびととちちりり震ゆひひ出でて山崩水溢やま
ふふららむむととちちりりの雪路ゆきぢと牛都うしつが間小隔あひるる紙門かみと
仰あげげて燈あかりと消くひひををくくままれれ暗やみととなりなりぬぬふふ雪路ゆきぢと
素しより地震ちと恐おそくくとと大おほくくななりり杯さかを戦か々々ととい

何^{なん}〜〜〜紙門^{かみかど}の伏^ふ〜〜〜知^し〜〜〜得^とび入^い
 りほ〜あか^{あか}恐^{おそ}ろ〜助^{すけ}けあ〜と牛都^{うづつ}小^こむ〜抱^{かか}きけき
 懼^{おそ}〜〜〜居^い〜〜〜斯^す〜〜漸^か〜〜地^ち震^{しん}も止^と〜〜
 雪路^{ゆきぢ}〜〜心^{こころ}おち〜〜此^{こゝ}光景^{あかりさま}を^を知^し〜耻^はらひ退^ひて〜
 〜〜〜あき〜〜〜おぼ〜〜小^こんほ〜も耻^はらひ免^{ゆる}さ
 め〜〜よ〜あ〜牛都^{うづつ}何^{なん}〜苦^{くる}〜か〜女^に性^{じやう}の身^みあ
 こと〜お〜も〜らん〜云^い声^{こゑ}正^{ただ}〜〜宵小^{よひこ}謳^{うた}曲^{まが}師^し小^こ似^に
 心^{こころ}裡^{うち}密^{ひそ}小^こ喜^{よろこ}び^は流^{なが}れ^は宵^{よひ}の^のち^ち唱^{うた}歌^{うた}あ〜〜か〜あ
 さ〜や〜小^こ爾^に〜ノと應^{こた}〜ね〜〜〜嫉^ね〜〜

もや〜で四^よ方^{ほう}山^{さん}の説^せ話^わ〜り〜己^{おの}身^みの〜ふ及^{およ}び苦^{くる}〜
 ぬい吾^{われ}々^々小^こ誘^{いざな}ひ〜さんとい〜を云^い奇^き〜〜詞^{ことば}の志^{こころ}
 不^ふ〜宵小^{よひこ}謳^{うた}ひ〜〜を聞^きて心^{こころ}ま〜いあ〜〜想^{おも}
 ひの不^ふ〜を云^い用^{もち}〜牛都^{うづつ}岩^{いわ}木^き〜ぬ〜小^こ幼^な
 児^こ〜と〜疱^{かさ}瘡^{かさ}〜眼^め瞽^{くら}し不^ふ〜醜^{みにく}さいをん〜
 たの〜か〜事^{こと}小^こ遭^あ〜〜め〜夢^{ゆめ}〜〜
 遂^{つひ}小^こ鴛^う鴦^{やう}の念^{ねん}小^こ〜入^い〜巫^ま山^{さん}の夢^{ゆめ}を結^{むす}び〜
 程^{ほど}なく天^{あま}明^{あけ}小^こ〜ぬれば雪路^{ゆきぢ}お〜〜起^た出^でん〜
 始^{はじめ}〜牛都^{うづつ}が容^{よう}貌^{ぼう}を^を見^み〜小^ここい〜眼^めハ〜

の牡蠣まがひの肉にくを双ふたへ懸かるるごとく鼻はな凹くぼけ口くち曲まり疱う瘡そうの
 跡あとハ蜂はち室むろ小こ均ひとらば愕おどろ然おどろと呆あはれとけりかぬ男おとこ
 ふ斯ごとと知しりせばちかど露つゆをくも嬉たの戯びでもぞあをわ
 さましやと悔くひはけ慌いそ忙そ袖そでを拂はらて已おり住す處ど小こ飯いりり
 此時浴室ゆふの主あ謁じあて来きて云い昨夜こ夜やの地ち震な小こ浴ゆ室むろ山やま崩ぶ
 といへを修しゆ理りを加くへざり浴ゆあふと能あたりとある
 小こ雪ゆき路ぢ此時このとき病やま全まく愈いへばと幸さいの事ことふと想おもひ
 暴あ小こ此こ處こを立た去さ山やま小こ飯いんんとやを牛う都ととや
 も聞き知ち雪ゆき路ぢをとと約やく言ごのごとく俱とも小こ往わんとあつ

小こ没ぼつ理り會かい心しんあつども連つて吾わ家が小ことと飯いりり且また説せ
 雪ゆき路ぢも一時いつじの春あ心しん動うし小こよりて由よしちかきを伴ともひ来き
 つと只ただ顧か忌いと厭いとへて云い目めの癖くせとて疑う妬ねた心しん深こく
 雪ゆき路ぢが難た面めん款くわん待たいを怒いり時ときとてハとてなぞと云い云い
 罵ののなどぞすればまをく、踈う追お去ひんとぞれどささ小
 動うのぞほとく惱なむいり小こせをやと想おもふ折ありり最さいり
 説せ話わする処ところの強かう八はち虚きよ六ろく平へいが母ははを害がいし鎌か倉くらを立た去さ此
 地ち方ほう小こ忍しのむ居いりしが悪あ因いん縁えんの爾なら志ちむ所ところ小こして
 いつの程ほどより衰えん彦けん道どうが氷ひ人にんとあり強かう八はち雪ゆき路ぢも

とふたらりりし小素より任使を表とせしむる尋常乃
 鄙人との異草り少く風流なる容貌小歩路も愛る
 心のどげ強ハも雪路り姿色あるとく小家も身しか
 らざれば悪くも想ふほご小互小心通ハせて終小より
 らむ妹脊のわらひとあし小くも斯くよりのらひ
 よく牛都を厭ひ密小ハ志をぞ亡んと二尺顧その
 ことと謀りたることを方見りり一日雪路牛都小對ひ
 て云へりるハ此頃か家が知識もの方少くおんこの
 琴調あふを聞だーとく今宵彼所へ奴家と

得小ハあひをんやと初は牛都何の心もけりぞ易さは
 どのこととあつと肯くしけりうら連だちて出小々此時
 是十二月の中旬ちれ外の国の雪ハあるある小まし
 て此国ハ世小知られざる雪国して積るると人家の
 軒よりも高く国人も容易歩難く久小至多ハ
 絶て往来あふ小まして警の牛都かふべーと露
 ちくも歩も惱むと雪路りしく雪履とらるもの
 をとつせられもこれとささりて牛都りてを扶け
 牽りしつがしたてて歩りる此雪履なるこのハ雪

國の人用ひて雪中往來の便と云ふをたつりさして雪路
 ハ牛都を欺る各小一もひたる雪國の棧ある山路
 とそく廻るぬ鳴呼這牛都命ハ只是旭小あふ霜の如
 又風前の燈火小似てちふかりりる強ハ示し合さ
 ることとちふる最刻なり此知小待りけてあじろ只今
 二人来るを看てはくそ之出ろ牛都と捉へ遙る
 谷之搏し落る可憐牛都其所の岩彼野の石小
 觸る轉ひまらひハ落るる其くびと小呼くと
 叫びて苦しむ声甚哀らおろろく谷底小土る

らんと想ふとろハ四支断ハ小なりて叫ぶ声もゆぐぞちなり
 小なる強ハ雪路を互小回を見合せて雪え雨と笑ら
 けしとて我家小こそ師りりりかろとより強ハハ雪
 路が家小の君々晝夜晝酒をの樽ち小して樂
 しむるが牛都てびく一日小當りる夜二人相對て
 酒くかえし想ふと夜を南野寺の鐘かろくと音
 小驚きとびく睡らんと同一褥をうち被る枕を
 双べ寝んとゆる折る朔風颯と吹おえし雪おろ
 しの音とろくと郷音と均く遙ある山の方小て

あふくと牛の吼ゆる声幽小聞ある小二人怪しく雪おろ
 しハ常かなとど此雪の夜小牛の吼ゆるとて異しこれ
 とらち語ふらち漸く小牛の声近げくふはれとて何
 者う甚あられある声少て謳歌よのわりいよく怪し
 と耳を傾けて聞く小枝の雪拂へて雪ハその人の身
 小こそかきと忍うとよ想ひの深さ谷の雪積る然や
 着よや君はとる恨く知や人ともちぬしく謳ひ
 けく雪路が門もふ来ると忽ち泣くと叫びけるその
 声正しく牛都が谷へ吐き落しとこの声小彷彿り

ハ雪如忽ち色を失ひのふ悲ういと擗らち被く戦く
 居りる小強ハはまつくある男子をうねり挽きふおけ
 る刀携へ外の方の戸を披ひて窺ふ大やうらる黒牛
 小牛都らち跨りてわりらる少そとてこの強ハ愕然と
 して身毛いよざらしくと心弱く吐く声あらく
 う小吃云悪き法師の光景うかいで物もふとと力を
 抜て斬けくを焼なんどを消せとと牛都も牛
 も形ハ消て失りるか忽ち棟上小呵くともち笑か
 声のいと物もとくぞ聞へるとれより此夜を

とし夜ごと小半都が怒靈来ること前の夜ふかきこと
たつと小雲路強ハもいふして此縞を免さんと心も心
かきも然の者なりしが一夜りものごとく哥謳声し
くも此夜もよきとて物もごとく聞へりも小雲路と
想ふ時声傾小歌なり二人少く心ゆ今宵ハ早く
声の止めて軟しと息をふじとつくはくのう枕をこ
建てる屏風を用ひて入るよめあり二人ハ怪しこ
何ものぞと看る小半都いふ牛都世小ありしと
の穴 貌少く飄くて歩来る小を雪路ハ驚き呼と叫

んて入る強ハ此光景を看心慌忙枕をうつて投付れ
バ牛都が次女忽ち一團の鬼火となり雪路ハ面小掩ひか
よと見へし其まゝ消て生ぬる小強ハも暫し惘然としてお
アくるがやあつて雪路ハ色へたる心はく薬などよ
て呼活し人らちハつとつと怪哉顔色鬼火小撲と
如悉焦煉痛之堪ぐさ小を嘔的まとい根く小醫固療
をくくれば漸やく痛ハおこたりはくど鬼火小撲と
る痕ハ尚愈も双眼ハ暫鼻凹ま口曲て牛都ハ面小
彷彿たるて小心も頑雷なりくる小を強ハ始のほ

鳥居 雑 後



高予大維多友の下



牛都寛免
 媛婦小
 出示を

高野村長

十一

病やまひ小こううて顔かほ面めんのの草くさくくららとと想おもひひ一い心こころををめめののと
むむづづ少すこ少すこことこともも意い小こ叶はらられれハハ暖あたたくくてて罵ののるる
ほほとと小こ今いまハハやや早はやにに踏ふみみとと此こゝ家やをを去いれれととせせれれハハ
ううちち恨うらみみててゆゆららとと故ゆゑ雪ゆきもも深こくくわわババ心こころああららずずとと
暫しばしし此こゝ家や小こ留とどりり居ゐるるややりり

中五

怨鬼蛇と為す女夫の苦

且ま説と強つよハハいいよよくく雪ゆき思おもひひをを厭いとひひ折ひをを定さだ規めひひ密ひそ小こ出で行いんんとと
想おもふふううららととややくくもも二に月げつのの未ま小こ及およぶぶううららががささししのの小こ積つ
しし深こ雪ゆきもも和な暖たかまるる春はるのの光ひかり小こやや消きええななんんととしし人ひとのの往ゆき

来きししつつららぬぬおおほほゆゆはは一いち夜や雪ゆき路ぢ熟じゆく寢ねたたるるをを定さだ規め
ひひ貯たくわへへ持もててしし賊やくをを奪うばひひ密ひそ小こ家やをを忍しのびび出で鎌かま倉くらの方かた
をを志こころざしし雪ゆき踏ふみみととてて走はししににががむむととままれれ暗やみのの夜よたたららししがが
少すこやや忽たちちち道ぢをを踏ふみみ差さええ前まへ日ひ本ほん都と我われ山やま路ぢ小こをを送おくるる
ぬぬ此こゝ時とき何なにとと志こころざしし頻ま小こ腹はら痛いたむむ一いち少すこもも道ぢをを得えずずししほほとと
ああららるる岩い陰かげ小こ倚よりり休やすままららししがが痛いたむむいいよよくく強つよくくううてて呻うな叫なぶぶ
苦くるみみららるる且ま説と這はりり此こゝハハ雪ゆき路ぢ強つよハハ走はしし逃にげげたたるるをを怒いらりり焦こ
らら只ただ是こゝ風かぜ顛ひ子こののこことと狂くるひひ煩わづ悶もん終つひ小こ家やをを走はしし出でししううとと
何なに處ところととももななららずず方かたももああららぬぬ小こ眼めとと看みへへぬぬ足あしののままりりくく

高野麻髪の下

狂ひ走りけるが實も因縁の報ひもぬれぬしとさうころ牛
都を殺せし山路小迷ひ来て早くも強ハう呻声を聞くと警
捜小索より恨の隈敷へたてしきまをあらう云罵頭て瀧
備やしたうらん氷なをも懐劔を抜きて突ゆるを強ハ
慌忙く身を拵りて水を避るるを尚也ままたと纏りしよふ
ぞ此時強ハ壁く痛とおうらうらわの早く足を揚てま
と蹴る小雪路が心下小當りけしババドろく少くもたゆとせ
さ忽ち身を轉し遙の谷小落小くる其光景牛都がら
小死する時のごとくも體そとの鮮血まよふれて失り

りり川時谷底しく嗚呼燥脾胃うかるとあはれける声の
嶋小首て恐ろしく聞へしが不思議や谷底より一道乃
鬼火陰々と燃あがり強ハ小たうびさかかふよと看へし
怪哉強ハ呼と叫びて絶入たり嗚呼三因返ハ還る車輪の
てく前小牛都が死念念雪路を醜女と侍強ハとの中を
裂二人を此地小引奉らせ強ハがゆをかつく雪路を殺せしめ
恨を散とくも悪因ふかくむめて又雪路が怨念強ハが薄
情して残忍なるを怒り斯祟と做すありたり是渾己の做す悪
業の報ひ来る如くあり此後強ハ尚甚の祟をとり稟く

高野村の権後下

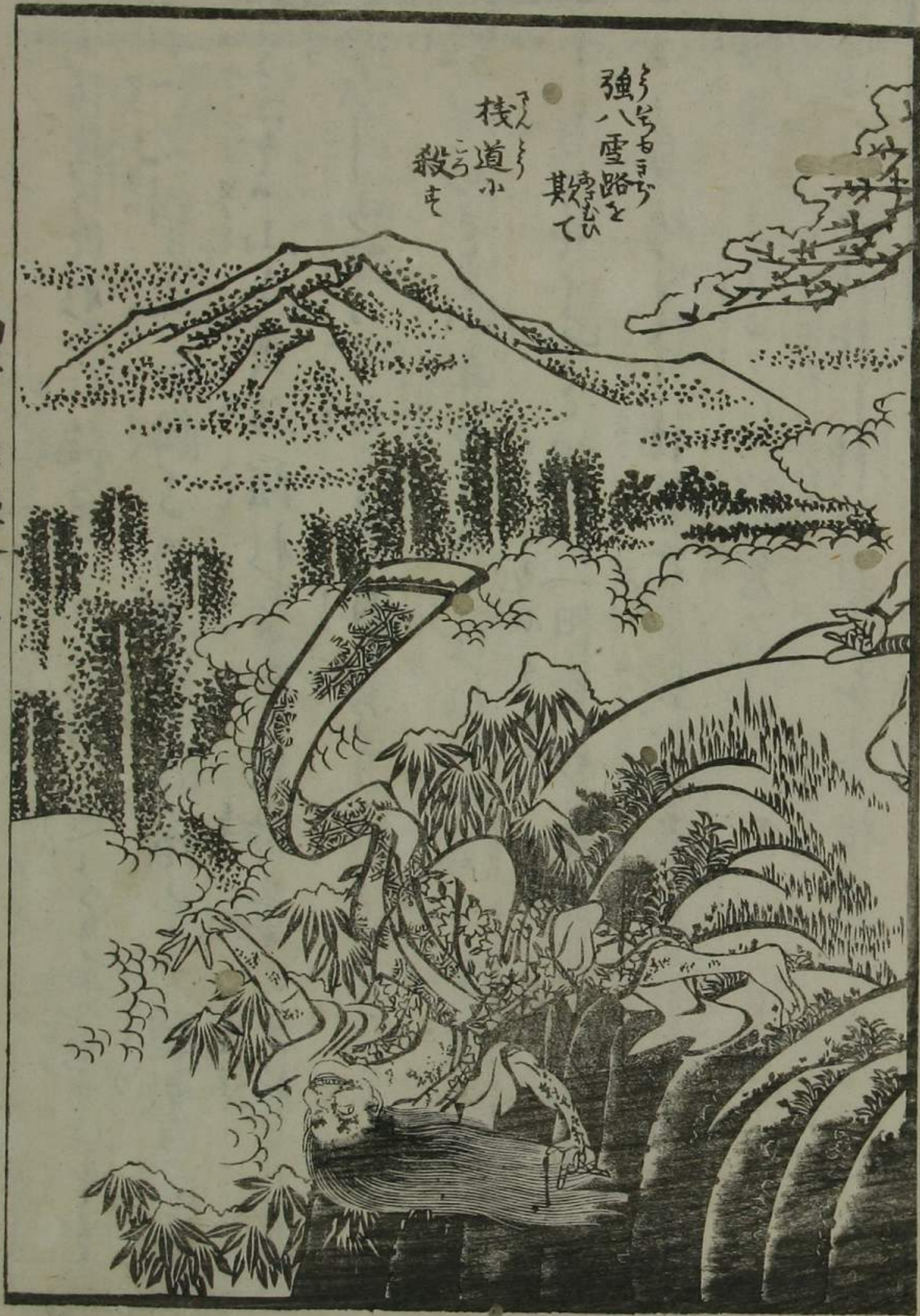
十三

下回り分解を聴奥小高野山南光坊の住侶仁海
 桑女を孫次六夫婦小託その身ハ善光寺小詣りし
 深雪小途埋て歩難しほ小暫く善光寺小遍留てあ
 此程や雪消して驛路もゆけぬる小いづや高
 野小飯人と今曉朝まご小善光寺を旅發て今此棧
 道小逕るこも強ハ絶入る所小来ると此
 光景を着る甚便たこと小想ひ藥たつと合を
 多方小女保せしは漸やくこつりるる小仁海存びまら
 何声ハのくこ問まば強ハ意言とせんとせきど何と

中叫のまを經ちどりて締らるごとく息小はれ
 あくねばいと懐しめて懐の裡を窺ふ小こいつ小大ゆる
 蛇の二重三重小纏け頭をゆけ糸の舌を咬しつ小
 さしも膽太強ハも驚きと恐止あき苦し助けぬ師父
 やと叫びまよひて腹を露し狂ひりるを仁海熟くと
 看らるるかることよと怪しむる其苦患をぬんや
 頻小真言の秘文を唱へ念珠とて彼蛇を鞭手りしが堅
 く締るるこゆべしと尚素のこく肌を去らで
 あけけぬ仁海強ハ小封て云つりるハらる正と

人の執念とむねゆわが容易小免るべしもあつても早志を
革身のほどを懺悔して佛の道入ありて負道ハ高野
山南光坊の仁海とくするものなり我山ハ女人禁制の靈
場なりしが吾と俱小登山しめく蛇の患ハ頑小免るべし
と説示小強八身の苦しきがまふく強悪の心忽小轉り我
身の一五十一を懺悔して位才とをばしめくとあつて願
聞ふは仁海人を救ふ素より僧のこころなり細
かろくと兼引てゆゑ小強八を俱ひ高野山小赴らるるが
日數經りて既小山小登女人堂をさるると不思儀や

今まし肌小まらるれ蛇霜の旭小あつて何方とも
なつて消失されハ強ハよく佛恩の黍を感佩し終り
仁海の徒才とあり法名と道珍と號し只顧經と讀み
佛小事りる甚殊勝なりて平話返還小年徑く
前小彼剃刀師孫次六夫婦鎌倉より携ひ来り一園子の条々
既小成長ふして今年十二才小なりるが其容貌甚清
らうゆして彼在中將の幼見かりし時ゆかくやとあつり
思ふれり雨のそふ其性並やふして賢りのはと
ハ孫次六夫婦ハ吾見の梅見と均しく蒸くぬ斯長



高野村長下

七五



高野村長下

七五

去りしよりわかれ仁海より南光坊小迎より支度子にせしむる
 小一を聞て十を解するの女ありてふくくを聴敏なるを愛
 する小一山小其名陰れりて神童の天降りしを
 拾ひし小一と云て給り斯くあること四年を
 經りていざよふ年ありけり仁海ハ度牒を乞稟て
 剃髮させやむと想ひ一日桑女を近く招て云ら
 汝が身のうへに孫次六も説話聞かせけり昔我
 陸奥小まゝるとに鎌倉ある長谷の観音堂小宿り
 ける宿汝其所小拵られしと吾拾ひ得る孫次六夫

ころらくと流し今ハもや黄泉客とてうぬゞをわはれ鳴
 呼不孝の子ハ一期とも養ひ果しありせば先づらや
 こそ甚心苦しうへども生者必滅の母のちるい詮
 申べかりし事小ハ小子ごとくハ露とらりも悔めしむ
 只く老を養天年を保んどありと云て次子妻
 云へりけるハ我亡あとふておん女かんの身みをもて母人
 と幼児とを養育と難るべけれどいふもよし好
 養てたゞよ是ぞ千万部の經陀羅尼よりいさる
 小増りし一回回とて是までハおん小め

隠しはれども今も聞へりたり我昔ハ武士の數も
 いらし身をりしうと薄命小して苓落せしとおん
 う父憐れて吾をよこし此家を嗣し免りいたれど
 天命免れぬとして負小苦まきと高恩の養母
 養ふ小心のまなちぞ斯てるんも口惜くいう小もして
 故の武士小ちり母人をよこしめおこし小栄耀の樂を
 棄てせんそのをとをふ折る彼短刀を治得り
 こ天我望とげめめ小詳をめとてとて深く
 秘置て他小出まを惜高野沙門の詞を聽

汝の心ありふ吾も喜がし近日うち小京師小のり朝
 庚の首尾を伺ひ度牒を乞て得道なましひべと既
 其準備をぞ做小たり爾小道珍法師を牛都と雪路
 と執念小恐り菩提の道小入け高野山小登り
 しも恐ろしうし雪路が執念の蛇忽ち失りしほふ
 深く大師の冥助を感佩し山を下りを行ひまほしてあり
 ころが天性の惡心一旦ハ懲り善小歸りまどい能
 久しき小堪ゆべき近頃心漸やく怠り山を下らんと
 ぞと仁海深く戒く下山を許さるは詮まば

なるそありたる折るる冬来女が艶ゆうたる容貌小しう懸
 想へて折ふやと時小けとて想ひのやと云聞ゆれば心
 さゆ正しき糸女難面ひのりひて兼引とるやと道珍ふ
 うく恨こ忽ち旧癖の邪心発動ていふあもして糸女小
 此怒を報んと想ひくくこそと皇天糸女とて祖
 母の難言を復しめ道珍が悪業身をてとて小及端を
 をと出しあやあやあらん且説孫次六々家僕小平
 ととるそのあつその性白痴小して好色なうくくるが主の
 女兒松思う容貌の艶ゆうるのこゝろ心さゆとて完去る

風流ふ深く想ひを焦し殺し挑りくもど誰か知
 ん梅見つろのやどよりり糸女清らあ女の勝を
 一紙愛婦人うんとのいかる男子を失小持てこそ
 本意たの事と想ひそそれい萬平がむくけけ小鄙ひ
 たる身をもとて綱纏正ることをと云聞ゆらむと悪
 と腹たてととと云懲めるあそいとと想ひを焦し
 孰く梅見の光景を定規ふり糸女小心あるとゆち心
 とと做べと術とととあつんとと独心を痛めたり素這
 萬平ハ孫次六々家小年久しく奉公するは南光坊へ

も時ときく立入たていりくつとつとく道珍みちちんと親おやたるなりて互たがひ小こうう
 ちやく語ことらひ其心そのこころをよく知しる此人このひと小説話しやうせつわハこと整正ととのへべ
 道みちを得えへ一日いちにち密ひそか小道珍こみちちん小對こたいて長老ちやうしやう小人せうじんがらふと
 他事たじをやくおほおほれればばららたたるる事ことを頼たのむとあある
 何事なにこともああははしし兼かみみ引ひききああひひかんかんやと云い小道珍こみちちんこれ
 事こと華はららるることことを云いへへるる人ひと多おほく汝なと我われ同おな小何事こなんに辞ことばへへ
 とくくアあひひととああるるを萬まん平喜へいぎんで甚い耻ちしく道みちちちらら
 ぬこと小こをを念ねんふふとと小人主せうじんしゆの女児むすめ梅見うめみ小懸想こけんさうして多おほく
 想おもひひののほほとと云い聞きゆゆれれどど彼かれ采女さいによを愛あいする心こころああれれ聊ちやう

も肯いんんららるるくく小耻こちままらられて今いまハハもも想おもひひああるるより
 外そとハハななししああるるれれ長老ちやうしやうの法はう力りきととりりく我命われいのちを助たすけけさ
 ちのへへと云いへへららねねば道珍みちちん執とくくと聞きて心こころ裡うち密ひそかか喜よろこび
 吾われ采女さいによ小恨こぐみを報むかへへるる時ときららそそ至いたるるつつとと暫しばし
 沈思しんしてありありららるるが早はやくく一いの謀まうを設たけけ出だして云いららく
 此事このこと佛ぶつを祈いのるるももそそももよよしし能方よきかた便べんあるるなりなり彼女見かのむすめ
 采女さいによ小懸想こけんさうををたたけけるることことを幸さいららるるを吾われ今いま采女さいによ偽いつはり艶うつくま
 を作つくててよよめめららねねばばららねねと梅見うめみもも答こたへへてて這般こゝろ々々
 彼はかれ喜よろこびびでで意い々々々々とと一い雨あめしてして后のち遭あふふるる期きと約やく

其時不臨んで汝采女が容貌小才拵は是容易
想ひを遂に云教自もハ萬平かきりかく婿
難有や実小佛菩薩の妙智力かとお返此
成就せば篤く報ひ奉らんといふ艷書をなびあへてわ
る小道珍素より偽筆の妙を得たれば極ち一封の
艷書を寫て返すれば萬平をれを懐小急き山を
そ下りたり

第六

二子謀小中て不義小陷

且說萬平ハ家又飯了隙を六親小客小彼偽艷書返

梅見小とわねハ心の裡喜ぶといふ前小耻し萬平ハ水
人なるをバさるる小應答もなりがくそのまううら返
しりるとハ萬平甚憂るるをわしと云へるハ小人が
手より出せる艷筒なりとハ爾一のあつも道理ありと
今云へることを聞くとさる人嚮小難面直つる小よりそ熟
く想ひめぐりて小賤下郎の身をそとて主の娘を意
ましくしるハ恐る多く浅猿さるといふあはば頓ち想ハ
ハ絶ゆるより然つる小近頃人も愛慕して風声もか
る采女より男色小あつても心まどひぬるといふ

かしくとより来りしる数々の艶簡をとりて仁海小披露し
糸女小あき名の濡衣を着せ皂白紅緑小語言志はる
小ぞ仁海この縁故あるべしと想ひぬわど詮とせ
る不義の艶書をとて云へるちよふ詮とせと糸女
を呼て吾想ふ旨ありは今日下山して孫次六がと
小行べし縁故の跡より云んとある糸女ハ心と得ぬ
こと哉と異しと想ひぬと師の命の求し難く南
尖坊を立出て替をとりて下りたるが女人堂の前と
るるると日既小暮たうんと志はしととも徒よるん

本意ちよしと出堂小語で御佛を伏拜つてまがふまう
んとて句欄のちよより外の方を望む小此時三月の
中旬をとりて四方の山雨伝濃ゆある中小柳を緑を紅
ちよとしか只是一張の錦幕をとりてまがひとちよと目
うれぬ風色小あきと時とちよと脚居る小極ち極
の方よりちよりの女児のまがてあり近くたるちよ小
く肴一肴ふ小孫次六が女児の梅見たりたるあきと
及甚不審しみ彼見此知へ何事のあきとて只一人ハ来るや
らんと想へるちよと近くたる彼も遠方を着けり由あり

高野聖後下



高野山 後下

大



高野山 後下

十三

げあゝ急ぎまゝいよ〜異〜出迎〜同〜今愛
 何事のありてむ〜此如小ハ讀つてあ〜やとあるふ
 梅屋つと耻らひ〜る〜斯〜戯れあふ
 無〜のごと〜今日も此如少て見へま〜せ 行楽のこと
 ちも計し〜人と辛〜て家を忍ひ出い〜 追人の来ら
 られま〜で云〜め〜る〜も空ま〜らう〜らんふ〜人
 目を避る方小誘引〜へ〜云〜るふ余女ハ想ひも〜けぬ
 ことを聞〜深〜異〜果〜る〜ハ謾〜る〜想〜あ〜今愛
 ハ拙〜う〜ど小騙〜ら〜る〜も〜め〜る〜う〜此知ハ是 高野山女人

堂少〜小入ハ余女〜め〜る〜心〜を〜控〜〜と〜り〜家〜子〜飯〜の〜
 小入も今愛の〜〜も〜ま〜る〜た〜れ〜つ〜ご〜め〜る〜急〜げ〜た〜て〜
 連人〜と〜る〜ふ梅屋〜ら〜ら〜腹〜を〜云〜ら〜く早〜くも〜め〜る〜人〜の〜心〜を
 總角〜此〜頃〜も〜年〜〜と〜人〜〜と〜想〜ひ〜あ〜〜る〜ふ父母の身
 君と愛結〜て又〜あ〜る〜人〜と〜云〜聞〜め〜ひ〜め〜れ〜を〜奴家若夫
 を持〜り〜め〜る〜を郎君〜ら〜ら〜ハ〜と〜心〜を想〜へ〜る〜ふ前頃艶簡
 りて云送〜め〜る〜こと〜と〜正〜ら〜る〜〜と〜知〜れ〜ど〜預〜〜想〜へ〜る〜人〜の
 妹〜〜と〜殺〜〜聞〜め〜る〜〜は〜ど〜小耻〜の〜〜も〜その應〜答〜を
 て〜〜り〜裁許の艶書小深く妹脊の約を固〜り今世も

此知めて見入りんと艶書とて命こゝろひらくる心ごとく
 く膽大なる事やうぐ父母を欺き忍び出く此知よまづ
 を斯難面欺待めつ前小艶書とて云ひ越しあつる
 ハ宜言ふして奴家と愚弄一時の笑を催しあつるや愚
 しき奴家たかしくもかごりの恥を受けてちと存生居ら
 るごとくと采女が佩しけ彼戒刀とをよぶき腰刀をぬき
 奪めし心下小おしあつて既小自害せんとすふれ
 采女前よりのこととを聞て想ひありげ小黙然として
 あつて一が只今自害せんぞる光景と看て慌忙柱く

云らくは物や狂ふ只今宣つることさうふらふこと
 しとらとて少く想ひあつてこととあれが吾とよ
 して送しつと云艶書めつとく着せめとあつ小梅見
 稍自害とてまうと袖の裡より穀多の艶書ととり
 出しつ初小送つめひぬと某日と何時とそれく小
 冷牙とあつて赤くつと采女一箇とく園小殺手跡
 小露差とされば且殺馬と且不當と暫時沈思とあり
 ると大さ小悟て云つらと此艶書めつ想ひ當と
 ることとあれ今朝も師の坊小人をして令愛

のしとふしあまづ一縁故を跡よりぞ云中へんと宣ひ一^{のしとふしあまづ}
 その不審をうし師父の命かつとて只今まうる処ちとふ^{その不審をうし}
 不圖も今愛と此知小遭く如此小及ぶることと正^{不圖も今愛と此知小遭く}
 道珍が奸計かめめ彼吾を急せ一が難面云ひてさぬ^{道珍が奸計かめめ}
 ると深く怒り吾偽筆をこし今愛を教さる應答し^{ると深く怒り吾偽筆をこし}
 め少驚面をりて師父よ謬言して二人小不義の濡衣を^{め少驚面をりて師父よ謬言して}
 こせしちのらん吾はつふさうも怒を稟くる身中一^{こせしちのらん吾はつふさうも}
 めとん明らむ方もあまご今愛を吾とても小同縮^{めとん明らむ方もあまご}
 を着せるとそ心を得ぬと云つるを聞て梅見をどめ^{を着せるとそ心を得ぬと云つる}

て悟りて云へりハ爾宣ふあよりて奴家も想ひこく^{て悟りて云へり}
 うこころとと萬平まじと宣せしと新面をりてお官ハ君と^{うこころとと萬平まじと宣せしと}
 の水にて瀟々云つらぬと首をを詳ふま守られ茶杯致して云吾葉^{の水にて瀟々云つらぬと首をを詳ふ}
 平小急せられしと且萬平を頼くることとさらふさへね^{平小急せられしと且萬平を頼くること}
 ば一余く道珍萬平の二人各急の叶くをを他と^{ば一余く道珍萬平の二人各急の叶く}
 斯謀つじとおぼゆればたて今此冤罪を明らゆんと^{斯謀つじとおぼゆればたて今此冤罪を}
 みるもちのしと能云ふことを得て高恩の師父小一^{みるもちのしと能云ふことを得て}
 も悪まのしとあや何の面目ありて存命べきと腰刀小^{も悪まのしとあや何の面目ありて}
 手をかゝるを梅見懺悔その手ゆきつりてんやま^{手をかゝるを梅見懺悔その手ゆき}

あひそ 郎君素露 びらりも 失らふとて 生かば 心静し
時を俟め いかん 云 明らめ 期あり 終りぬ
いふもして 存命あり 奴家こゝに いたげし 心あれば 斯
欺むれて 敵を 走り 母操を 失ぬれ 父母は あり 世の人
何とて 面を 合さる ぶさか ぐく 恥を 露人より 死を 早
かき こそ まさしく ぬれ ぬれ 業々 令愛 今も
死し 我故 非命の 死を せし ぬれ ぬれ 思
ある 令愛の 父母 小然 する 程あり 死も 心易く ぬ 只 存
命て 父母 小孝と する ぬれ ぬれ 小人の 素鎌倉の 長谷の

内堂の 取手 拵らぬ 師父の 拾い 今受の 父母を
頼み ありて ややく 人より ぬ 斯の ぬれ 身あり ぬれ
ハ 師父の 悪しき 受ハ 何入 露の 情と ぬれ 早く 黄泉
ふ 往く 見え 親を 知る こそ 樂しき 此カハ 吾拵らぬ
こゝに 添あ ぬれ 戒刀 生涯 身あり 師
父の 賜し 此カ 命を 縮め 生の 親あり ぬれ
心ち ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ
そと 互に 死と ぬれ ぬれ ぬれ

第七 母子奇遇して 讐敵を討

高野権後刀下

廿八

よまうとてしよしよまきこしあまうらじの母くやあかきうらぐ
弄ひて吾身のうへも説話互ふ手ふ手ととりかじ嫉し泣
あぞ泣ふかり且説這裡道珍法師奸計とりて今日
衆外梅見のあううと此處おむと其集會と定規ひこれと
扱搦と山をとり都の方へ賣うとて歳兩りの金ありて
それとて再び俗の樂を極めんと願く悪根を語り
ひ女人堂のちふ忍むを置きてこれと此処小密に居てた
刺りりの光景を定規ふ處六平が妻子ありたれば驚若我
を難言とありては大事さうり早く失んみまると立出んとて

る這ちより孫次六が下僕萬平ハ愚さうる心は道珍めく謀
計のありしはあううで只救ふよと計りたるごとく喜ひ今日
梅見お迫りて日頃の想ひをうらさんと一佛出世二仏上天乃
想ひとちり只今此処小来り梅見が居ると望く着てとて
好む時をうらと慌忙く堂へ走渉るふとて道珍子行
少留互小愕然と驚き右左小飛去とり此時日既小暮月
山の端小は昇る影小まると音て道珍さやも萬平
ちりるを知ると妙なりと想ひし声をもうけを禅杖を
拳うくとと撃つ萬平呆れたり狂氣しあひうら萬平

ありてはそとと耳聞へてうろこく連打小撃手あざなひ
 堪ゆき萬平忽ち撃手仆さし目口より鮮血漉くと流出て
 そ矢小なり采女此光景をみ殺馬さまとい母と梅見を恨ひ
 逃れ去んとする道珍臂をのぞき三人と泣きとめ預く
 忍びを真する鬼根を呼んと相済の笛を吹るそ四方に
 木陰より小出る大漢子三人蹴せ怪哉ハ今中ぞ暗く天暴
 小かき曇る風雨烈きして雷は人おとろくあつて
 咫尺もぬ黑夜となり忽ち一声の雷鳴響山も山明る
 はかりもれば衆人恐るくうち臥れるが暫時ありて

雲晴風雨歌ぐ素の晴天とあり月と明小なりければ
 采女親子梅見の三人あて首を揚く息を看る小
 道珍を首か極くしき黄子三人まで目より血を流し
 全身所くろくわたりかつかく絶て居おど塊飛氣消むり
 栗く想ひ互小恙をさし喜ぶ采女道珍稍息出てあを
 苦しや堪げると胸をうけて叫ばれ驚くられを看
 るゆえいふ道珍胸のきこり腹小くけて大ゆらる
 蛇の纏けいてありけるう忽ち采女親子を看て口土を
 云吾ハ是信濃国の雪路と去る寡婦ちり此道珍



原の名ハ強ハレて虚六平が母を殺し退吾亦此人殺
 してその無念やうくくくくく殺すゆへ此と云うる言
 して仁海師の教化より菩提の道小入のう此所
 山に俱るこれぬこの如ハ是女人禁制の靈場なれば近つ
 くと能くび室あうる所が前以采命が色は迷ひ破戒
 無懺の身と云う只今心を下りぬをハ神や仏小くも
 され一程小今こそ本懐を遂人と斯ハ苦一ままつる
 ちう海もとく此道珍を殺して仇を報ひぬと狂ひ
 まうて云うるくくく采命現まらぬて仇人ちうを

知て討んとまはれどとてしもさうさうとて無業場と云う人と
 とを憚心ちうあどの躊躇てあうるくくく不悲ひもけぬ仁海は
 生まれへる采命命をさ進出て縁故を同人と云うるを仁海と
 してと止めて云へりけるハ今日の事心得て六前前より此采命
 有枝有葉を知ぬと小尼對ひつる小尼媪を眞道り言の空
 しかめを今こそ想ひ知あつるや短刀の祟のほどを
 考くあへるしめ尼媪が夫ハ病小先又母ハ強ハ小室を
 且采命を拵る及びて其刀我丁小渡りしが向いまど
 虚六平が家小出のくく周縁ららららや采命を

高野菴箱髪刀下

廿三

返一ふあると勿らマル我の汚名を世に清く此知少く結
 刀とて自害せんともいひしども見ん者心あるらん
 目ら媿菩薩提の道ふん々裁許の善根を做けり
 より禍を及して親子奇遇一知らざる仇を知ぬ是
 渾仏神善ふ福しあふらねばとて彼刀とて
 此道珍が命を縮む一此入道一旦菩薩提の道ふ入し
 うど惡業の報免れ難く破戒無懺の身とらりて
 如此とて苦しと受るちう梅道珍が此禍をせき出
 せ一ハま此山に惡縁多く住しと大師深く封置

多ひたれば更ふへと害ることあり一歎つる小笛の音、此の
 声小似るれば若笛の音を二発することあり友の来ると
 想ひ此山ふかれ住し起出るなり此大師の笛、此
 禁トあひたると道珍山禁を犯漫小笛を響言たり
 は忽ち大師の四討を世に清く此知少く結
 聖路が寛免小若一まされ己れと身の悪事と口を
 する事、實ふ是佛神の悪業をせしふ知らしむが救ふべき
 自由ありとて計、彼ら因、とてとて一爾マ
 刀の祟もつるべ一と詔、りまは親父子とて

喜ひ仁海の詞心 米女勇上
 出狂ひまゝとる道珍の對ひは 道珍怪し小聞我
 は是虚六平が妻子ちり 祖母の敵母の仇想ひ知ると斬
 けくまぶ道珍此時本心つさ早くも身を轉してられを避
 あざとつらつと云へつらふもあはれありぬ汝おと
 とくも吾と付んとくもも 端鯨の車と遮んとくも均
 一のまゝ一りづりく返討きてとくもまへと推持り禪杖
 を拳て撃んとくもや一り小まといひ一蛇の頻と締るや
 四取まゝくくして動と得とくもろろがひ轉べハ条女得とくり

やわめと討太刀の光もも小道珍が首ハ前あそそ浴よけ
 了時り不思儀や道珍の臆より一團の鬼火陰くと燃
 上れハ只今まごまごも号する蛇の形ハ消く失ふもも小
 らんく奇異の想とる一ぬ斯て条女親子ハ道珍と首を
 りて老母の霊を条懐旧の涙ハ袖を湿り此時既小天
 明のめかりめめハ仁海三人を將て山と下り孫六が許
 小至しハ彼家ハ梅見が春つづる小教馬さまといひ一知を
 其縁故を問へ仁海 夜の二五一と討不説話ハ者尼

を引あつて且云らく... 孫次六親子ハ... 梅見と夫婦... 必忠あるとのちうとして... 糸女が孝義のこゝ国守の... 必忠あるとのちうとして... 糸女が孝義のこゝ国守の... 必忠あるとのちうとして... 糸女が孝義のこゝ国守の...

高野雜髮刀卷下終

奉りしこと... 赤松公其由緒... 小深と恩恵を... 父の遺言... 無二の忠を... 孫次夫婦... 高野雜髮刀卷下終

高野雜髮刀卷下終

高野雜髮刀卷下終

飛彈匠物語 ひだのこくみぢのこころ 六樹園 六冊

魁蒞 標注 曲亭馬琴著 〇、雪 五冊

春宵 奇談 壁落穂後編 小枝繁著 五冊 北奇畫

忠孝潮来武志 立河馬馬著 五冊

於奔女 余々 高野薙髮刀 二冊 小枝繁著 北嵩畫

繪入 長門本忠臣藏 六樹園 一冊 清登著

右之本當年出版仕仕乃以求涉此凡の各下以
文化五年辰正月發行

江都書林 麹町平川甲二町目 角丸屋甚助

